

回会報

新日本美術協会

事務局
千葉県柏市大津ヶ丘
3-17-17-401
森屋治三方
Tel.04-7191-6760

編集委員
小高峯夫
富岡ネム
大石亨
四方公子

次号平成26年8月予定

心の時代

鮮やかな色彩と燃えるような筆ずかいで生きる喜びと命の大切さを描き続ける画家、大阪芸大の教授でもある絹谷幸二氏のトーク番組(NHK、TV)があった。視聴した方もあるかと思いますが、絵を描くことの意義や心構えなどに触れているのかいつまで記してみます。

相反する概念は別々のものではなく、一つのものの一部である。(維摩・仏教の教え) 例えば朝がきて、夜になる、朝と夜は別々のものではなく、同じことの一部である。戦争と平和、生と死、男女のこととも同様である。自分の短所は長所である。

絵を描くには、想いを強く持つことが大事である。切なる思い、あるいは成熟した考え、思いのたけを自分の中で成長させる、それが形になり、絵になる、想像力の翼を子供のようにはばたかせ、生きることの喜びと命の大切さを表現したい。例えば願いが叶ったら池に魚を放つというようなこと、想いと魚・生命がつながる、これを表現する。

伝統・歴史を学び、古いものの中から新しいものを創造していくことも大事。私がやっているフレスコ画の技法は、一万年以上前のアルタミラ壁画と同じ原理を利用している。石灰岩を焼いて生石灰を作る、生石灰に水をかけ消石灰を作る、これを漆喰状にして壁に塗る。生乾き状態の上に水で溶いた絵の具で素早く描いていく、乾く過程で空気中の炭酸ガスと共に絵の具を吸い込み化学反応で元の岩石に固化する。ミケランジェロがやっていた方法です、これを簡易化したのが今のフレスコ画である。

私は本格的にフレスコ画を学ぶためイタリアへ留学したが、この時強いカルチャーショックを受けた。東洋と西洋の違いというか、考え方がまるで違う。

こちらでは和とか融和という教えがある。ところが向こうでは you must say simply yes or no という教えです。イエスカノーが簡潔に答えなさいということ。あなたはキリストを信じるか? 信じないかという一神教の考えが根底にある。物事をあいまいにしないでどちらかに決めたい。自分はこのことについてはこう考える、と決めたから次に進む、それを繰り返す、そうすることで個性が生まれ、個人が確立してゆく。

絵においても彼らは内容を見ます。何が描いてあるかを観る。日本では襖絵的に見てしまうことがある。装飾的なもの、美しければいいという、絵の表面を見て裏に在る思想を見ない傾向がある。

ピカソの絵、あれは上手い絵ではない、簡単で分かりにくいということがある。ではなぜ世界的な評価を得、普遍性があるかといえば、新しい創造で一つの時代を進めエポックを作ったという点で価値がある。ピカソは一日36枚絵を描いた、一年360日として其れに彼の生涯をかけた枚数だけ描いた。個性と信念を以て胸襟を開き描くことが大事である。

私は始め無彩色に近い地味な絵を描いていたが、イタリアで色彩を多く使うようになったけれど描く内容はおなじで、無常感の中に生きる喜びと生命の大切さを描いている。禁じ手とされている吹き出し、絵の中にマンガのように文字を入れるをやっている。批判を浴びることを覚悟して進取の気持ちでやっている。

形あるものは壊れて行く、色即是空、色もなくなっていく、有ると思っている物は実はない、しかし形のないもの、愛とか、信じる事とか、絵に描いてある内容とかは壊れない、空即是色である。とにかく想いを強く持ち、形というものを

を編み出して絵にする。

日本を変えるには芸術文化からだと思ふ。現代は形から入って其れを能率というものに置き換え、代価を得ている、其れだけでは、もっと新しい飛び越えた創造は生まれえない。現状に引きずられ、周りの人の調和の中に引きずられてしまう。自分の翼を以て羽ばたかせ新しい想像力を働かせ全く新しいものを生みだしたい。十六世紀にダビンチは人が空を飛ぶことを考えた、其れが現在飛行機になっているというふうなことです。

絵を描くには、とにかくイメージを構築し研ぎ澄ませていくこと、旨く描くことではなく、心のたずまいをしつかり持つこと、そうしないと、経過するにしがいが次第に色あせて行く、絵は心を映し出す鏡である。上手下手ではなく心をどれだけ強く持つて鏡のように映し出せるかである。見目麗しいだけで内容のないものは時代が経過していくともたなくなる。心を鍛え新しい進取の気持ちを持つこと、目新しいものだけでなく古いものから、人間とは何か、問いかけてみる。そして今の瞬間を表現していく、世間の常識にとられない心の自由を持つことが重要。時にはひきこもることも必要、絵描きにとつては、引きこまなければ絵が描けない時がある。

ピンチはチャンス、ピンチの時はその反対を思いチャンスの時はずかぬ、ピンチの時はずかぬ、相互交換をすること、つまり双眼で大きく何時も見る。大きい絵を描いていると部分的にいいところ悪いところが生じることがある。これをどうしたらいいか分からなくなる。そういう時は目を細めて見えにくくする。するとぼやんとするが、全体が見えるようになる。目を大きく開けているだけだと部分的にこだわってしまうその部分は良いが全体をみるとしっくりしない、大きく見た中で小さい部分を修復していく。

どんな不幸があっても辛いことがあってもその部分にこだわらずに、広い視野で見つめること、全体を見て一部を見るとそれは大したことではないとわかる。日本は今長い不況と震災で大変な時期に在るが、今までにも多くの艱難辛苦を乗り越え復活かしてきた。災害に遭った方のご苦労を無にせず、新しい創造力を加えイノベーションを以て力を尽くせば、いかなる艱難辛苦をも乗り越えていけると思う。

(TV番組から引用 おだか記)

委員コラム

画家・高島野十郎について 小宮山 脩

高島野十郎(こと高島弥寿(やじゆ))は明治二十三年に福岡県久留米市に生まれた。四男だが野十郎の叔父に当る大倉正愛(一八六八〜一九〇三年)は福岡県出身の最初の東京美術学校西洋画科の卒業生(明治三十三年)の一人である。明治美術会に出品し太平洋画会の結成にも参加したれぎといた洋画家だった。だが早世したため野十郎との直接の接触はなかったようである。長兄の宇郎は野十郎より十二歳年長で、泉郷とも号した詩人である。

上京して浪漫主義の詩人たちと交友したり同郷であった美術学校在学中の青木繁と知り合う。野十郎は若き頃に度々宇郎に作品の批評を求めていたという。大学を卒業(東京帝国大学農学部水産学科)し画家への道を歩むものの美術学校や画塾に通ったという記録はなく独学で学んだと考えられる。

三十九歳の野十郎は欧州に向けて旅立つ。現地では日本人画家たちも滞在していたが、とくに彼らと交流することもなく一人制作に勤しむ日々だったようである。帰国すると久留米の実家に戻って庭の隅にアトリエを建て、晩年まで親交を続けた唯一の画家大内田茂士(一九一三〜一九九四年)は次のように語っている。「絵具を伸ばしキャンバスを二つにして切り取った一方を壁に何枚も張つてあったのです。これは何だだろうと思つてアトリエに入つてみると絵の具が塗られたもう一方の切断されたキャンバスがありました。これはどういうことなのでしょうと尋ねてみました。すると『一方は室内に、もう一方は屋外で天日に晒して、絵具の変化の具合を調べているのだ』というんです。……とにかく絵具を天日に当てたりして変化の度合いを調べるといった研究をずつと後まで続けられていました。」

昭和二十五年六十歳の時示現会大内田茂士(示現会の創立委員)の薦めにより第三回示現会展に招待出品している。昭和二十五年に野十郎は千葉県柏市増尾に移つて来ました。以前に写生旅行でこの付近を訪れ目星をつけていたようです。今でこそ柏は賑やかな街ですが当時はまだ